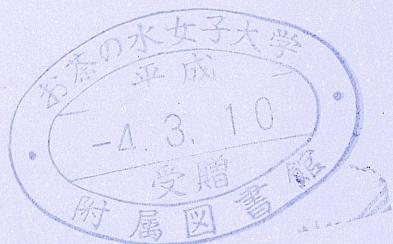


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1992 4



第91巻 第4号 日本幼稚園協会

これからの保育

現在の保育を見直し、これからの保育はどうあるべきか、実践例をもとに、現場の側からあるいは理論的な面から探った保育の基本的シリーズ。



①これからの保育1

「遊び」とは何だろう

②これからの保育2

「自由」とは何だろう

③これからの保育3

「課題」とは何だろう

④これからの保育4

「生活」とは何だろう

⑤これからの保育5

「集団」とは何だろう

⑥これからの保育6

「総合」とは何だろう

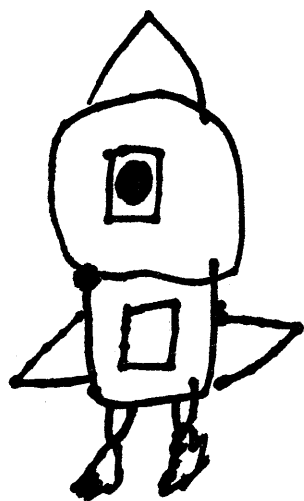
大場牧夫・海 卓子・平井信義・本吉圓子・森上史朗・共著

A5判 各256頁 各1,648円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼 児 の 教 育



第91卷 第4号

幼 児 の 教 育 目 次 — 第九十一卷 第四号 —

© 1992
 日本幼稚園協会

写真・子供讃歌.....	(4)
へ巻頭言／四月—子どもの視点に立ち返るとき.....	津守 真... (6)
保育への視座(2) 若い保育者の方々へ.....	河邊 杲... (8)
婦人宣教師、ミセス・プラインの「おばあちゃんの手紙」(1).....	小林 恵子... (14)
庭の番人ゝはるゝ 風・音・かおり.....	土橋 光子... (21)
幼児虐待を考える(6)	
遊ぶ権利を奪われている子ども達の現状.....	菊池 百合... (26)



思い出の中の保育(6) “人とかかわり”の難しさ……………守永 英子…(35)

遊びのスクランブル交差点(2)

「おやすみです」の多いおみせやさん(11)……………仲 明子…(39)

故国を後にして(6) 名を告げ合わず……………モーレンカンフふゆこ…(48)

まざる、まぜる、まじわる、幼稚園の四月……………豊田 一秀…(52)

ある日の育児日記から(16)……………佐藤 和代…(57)

若いお母さんたちへ 大地と共に(上)……………川上 美子…(58)

表紙・平野 清

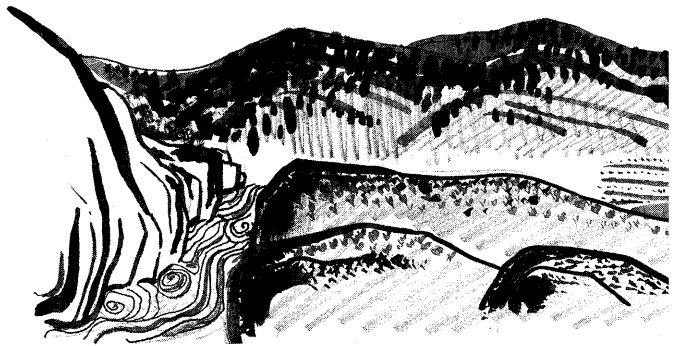
扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／吉岡 晶子・岩上 節子

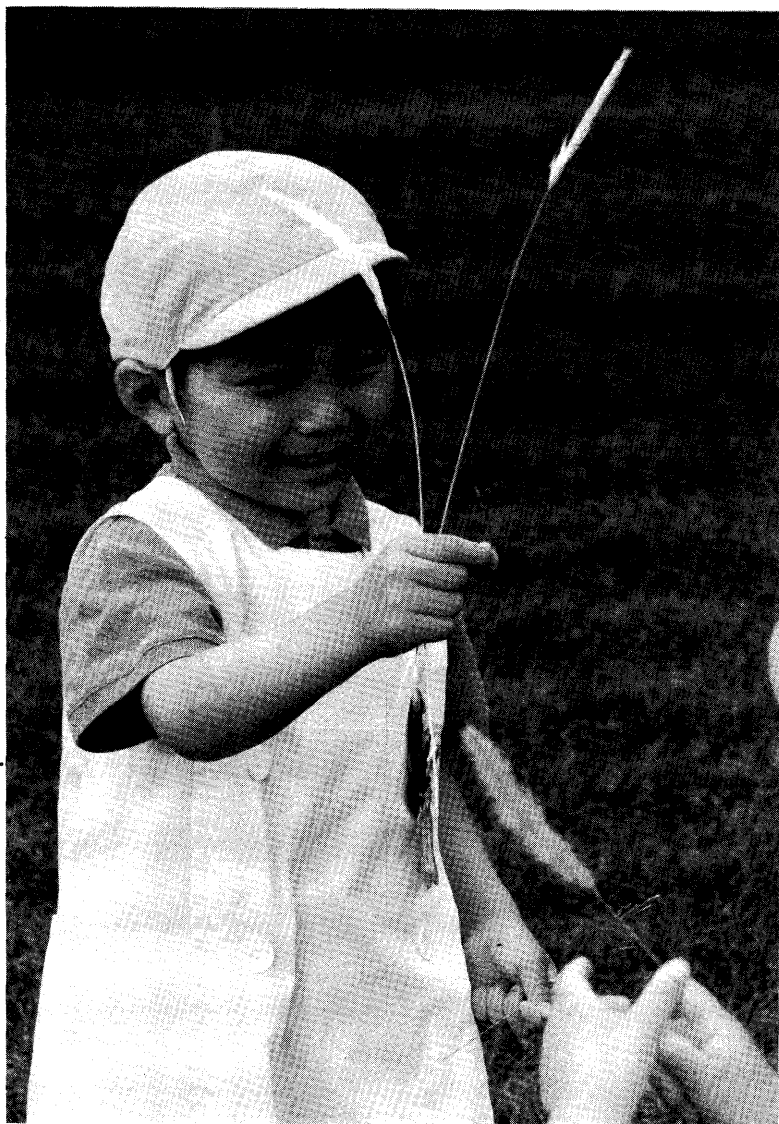
編集部・大沢 啓子





子 供 讚 歌

みつけたよ ホラ みて！



撮影・平野
清

四月——子どもの視点に 立ち返るとき

津守 真

先日、二歳半になる私の娘の子どもを私の学校につれていった。はじめ私は二人でゆっくり遊べる静かな空間がいいだろうと思い、公園に出かけてだれもない小学部の部屋につれていった。ところがその子はそこでは何か落ち着かず、私と手をつないで歩き回るうちに幼稚部の部屋に入った。その子はすぐに玩具棚にゆき、籠をひっくり返し、気に入った物を取り出して遊びはじめた。いつも幼稚部の子どもがしている通りのことである。

幼稚部の部屋には子どもの目の高さにいくつも仕切られた棚があって、幼児の好むがらくた道具があ

る。幼児がいつも遊んでいる場所には幼児の視点で物が並んでいることに、私は改めて気付かされた。いつも私が保育をしている部屋なのに、この日、私の目には違う部屋かのように新鮮に映った。孫を連れてきた私は、学校側の人間ではなく、子どもを学校につれてくる親の立場、つまり、子どもの視点に共感する親の目あたりを見ていた。

この日の私は、久しぶりに親の立場になることによって子どもの視点を取りもどしたのだが、逆の場合もあるだろう。保育の専門職員の立場になることによって、功利的雑念から解放されて子どもと純粋につき合うことができる場合もある。職員が自分の幼い子どもを学校につれてくることを私は嬉しく思っているが、そのとき、いつもと違う動き方をしているのに気付くことがある。職員としては子どもをの視点をよく見ているのに、わが子となるとそれを見られなくなる場合もあるし、逆に、自分の子ども

はよく見ているのに、職員となると社会の枠にしばられてしまう場合もある。しかし、保育や教育においては、親としての立場と職業人としての立場とはそんなに明瞭に区別できないのではなからうか。

*

しばらくして、その子は、玩具籠をひっくり返して遊ぶうちに、たまたまその日にはじめて来た若い実習生の手をひいて絵本棚にいった。さっき幼稚園の部屋に入ってきたときに、横目で絵本のありかを見ていたのである。それまでうろうろしていた実習のお姉さんも、その子に選ばれてつき合ううちに嬉しくなり、その子の視点で見えるようになってきた。二歳の子どもが遊び相手として選んだのは、職員ではない実習のお姉さんだった。子どもが自分の目で見たいものは、場所についても人についても確かである。

ずっと経って庭に出たとき、その子の母親が来

た。母親をみるとその子は泥を拾っては水たまりに投げ、一回ごとに歓声をあげた。泥を投げる一回の行為に全身の喜びがこめられていた。泥水のしぶきがかかっても、母親は泰然としてそれを受けていた。二十数年前には飛行機の音も恐くて私にとびついてきた、また、泥にさわれなくて指先でそっとふれていた子どもである。あのときの混乱を保育者に受けとめてもらって、いま自分が母親になり、二番目の子の出産に伴うさまざまなことにも混乱することなく動じない。子どもの視点で見える者になっている。私は、私の学校の母親たちや職員たちを重ね合わせて考えた。

四月は、親がわが子をはじめて園に連れてくる時である。園や学校の職員は、子どもに共感する親の視点に出会い、親は職員に出会うことによって子どもの視点を新たに発見する。両者ともに保育の原点に立ち返られる好機である。

(愛育養護学校)

保育への視座(2)

——若い保育者の方々へ——

河邊 杲

私が研修に参加した幼稚園から先生方の保育実践についてコメントが欲しいと記録が送られて来て、その中のI先生の記録に次のようなことが述べられていました。

「きょう『おしゃべりきのこ』の歌をうたっているとき、M君が部屋の真中で私に背をむけて、じつとうずくまっていた。私はまたふざけていると思ったが、何となく待てよと

思い、M君の方をじっと見てにこにこしていた。歌い終わってM君と目が合い私が叱らずじっと見ていると、M君はにこっと笑って『ほくきのこ』と。あっそうだったのかと内心うろたえましたが、『そう、きのこになつて歌っていたの』と聴きかえすと、『うん、きのこになつて皆に歌ってもらっていたの』……。この時待っていないかつたらきくと『座

りなさい』と目をけわしくして言っていました、M君の「きのこになりたい」心持ちとか、そのあとのうれしそうな顔とか、何とも言えないその場の雰囲気とかに気づかずじ終わったであろう。それどころかM君には悲しい気持ちを与え、他の子どもたちにも気まずい思いにさせたことであろう。ある講演会で聞いた『十五秒待つて下さい』というこばを想い出して、いままで私も十五秒待つているつもりでしたが、『待つ』といつてもその時の待つ十五秒は子どもにとっては執行猶予のような十五秒だった気がする。また自分自身に与えられた十五秒は、いつ言おうかといらいらす十五秒であったような気がする。『待つ保育』と言つても保育者にとつての待つのは子どもを追いつめる結果になりかねない。その子どもにとつての十五秒を待つてあげられなければと感じました。

M君はIQが120以上もあり、じっくり考える力も、一つのこと集中する能力も、説明を聞いて理解する能力も持ち併せている上に独創的なところがあるということを知つても、その時その場でのM君自身の心持ちの動きに触れようとしていないから困った行動をまたしているとした私の目に映らなかつたのだと考えさせられました。

もつともM君の『いま、ここ』の心に真にふれ感じとるようになれば、M君ならではの発想に気づき共感できたであろうと思つています。私の中にある「皆と足並を揃えて活動ができれば」ということをそれぞれがしだす前に、もつとM君自身の要求や発想をたのしんでもらわなければならないように思ひました。」と。(傍点は筆者)

I先生流の「待つ保育観」を御自分の保育

体験から、しみじみと述べられていて、保育実践に即した省察の数々からいろいろな大事なことを学ぶことができます。

まず、待つ保育については随分以前からいろいろな人が唱えられて来っていますが、あちこちで誤解されているのに気づかせられて来て、この用語を用いるときまたこのことを聴くとき、充分心しなければならぬように思っています。

それは「待つ」保育の本質が充分伝えられていなかったり理解できていないからのように思います。I先生の記録にもあるように、簡潔で、よくわかり易いことばとして、保育の見直しなどに用いられています。が、ややもすると短絡的にこれを単なる保育の方法・技術のように理解されてしまい易いことです。本来、子どもの主体性や自発性に培う保育をするには、もっと幼児自身に任せていいので

はないかとか、幼児の成長発達をよく見るとその育つ過程に時間をかけねばならないというところから説かれている場合が多いように思います。また教育一般について目的や目標を具体化していく過程でつとめて計画的・効果的・能率的に、ということが説かれたことから対象となる子どもを充分理解せず教導等による教化一辺倒に偏重したことへの警告としても、待つ教育（保育）が説かれて来たことも事実です。

然し私はどのような立場で説かれるにせよ保育においては保育の本質である、幼児の成長しようとする力や心を信頼すること、がその前提になっていないと、待つ心の意味が誤解されてしまうことを危惧しています。このことをこの記録でもう少し具体的に考えて見ましょう。

I先生の述べられている実践記録の中で私

たちがまず見逃してはならないのは、M君との関係について、その時その場で、自覚されたままがあるがままに詳述されていることです。

それはM君に対しての理解について「またふざけている」と自分のものさしではかるような断定的な見方をされてはいるが、その次の瞬間、常日頃のような、すぐ注意をするというのとは違って、じっと見てにこにこされていることである。そしてみんなと楽しく歌うことに終始されているところに注目したい。(日常的には「ふざけている」と見えたと、で保育者はそれにもとづいて助言なり指導をする場合が多い。)

また「ふざけている」という行動をくりかえしているように見えても、その表現の意味内容はひとつひとつ違っているのかも知れないということにあとで気づかれたことにも注目

したい。

つまり「いま・ここ」におけるM君の心の動きにもっと添うようになれば、ひょっとしてまた違った発想による表現も見えてくるのではないかと述べられていることでわかる。

M君に即いて「いま・ここ」の心に添えないでいるために、またいつもと同じ困ったことをやっているとした目に映らなかったのでしょう。ここは極めて重要なところで、I先生がM君との関係の中で何か常日頃と違ったものを感じられて、ただじっと見つめにこにこされたように思われます。それは無意識的な動きのようでもあり、何時もと微細に違い、ここは自分でもなかなか気付けないところかも知れません。「ひょっとして……」というM君への思いの広がりのようなもの(これが信頼感につながるものかも知れない)、つまりここにI先生のM君との感情的なつな

がりを感ずします。

しかも、どうしようかという何時も抱かれています。いらいではなく、にこにこされていてそこには安心感も感じられます。またこの瞬間のような動きではあるが、I先生の瞳に柔かななにか暖かいものを感じることもできます。

それは決して放任ではない。しっかりと見つめられている。その行為の意味は不明でも、ただただM君の存在を確認されている。I先生の姿が見えます。そして瞳と瞳が合ったときにこっと笑った両者の関係に、確かな交わりが生じ両者はきつと安らぎに似たものを感じられたにちがいないと思われまふ。この一連の動きの中でI先生は自分自身の感情の動きにはつきり目覚められているようです。

まだ全面的にM君のその時その場の心に添えないで行為を肯定的に受け容れられないで

いる自分をまず受け容れようとされているのが実によく伝わって来ます。そのことによりM君が「ぼくきのこ」と自己をすなおに表現したり、I先生が「ぼくきのこ」になって歌っていたの」と彼の表明を受けとめ確かめられることによって、「ぼくきのこ」になって皆に歌ってもらっていたの」と、集団の中で皆に支えられていたひとときの喜びを実感し表現してくれたのだと思います。

こうした両者の関係のところ、まさにゼニユウィン (genuine) 純粹であり一如といえる姿に近い姿といえるでしょう。

この保育者があるのままの自己に目覚められて、相手がよりよく活きることが出来る時の姿を「待つ姿勢」と言ってもよいように私は思います。

こうした心のゆらぎをもちつつ、それに目覚めて、M君のその時その場の心に添うよう



努められていかれることによって、I先生とM君との保育における人間関係において、真の援助関係が成立していき、そうした関係によってこそ、信頼感を深め、主体的に意欲を燃やしていきいきと充実した活動ができるようになっていくのだと思います。

保育者が心のゆらぎをもちつつも、それに目覚めて、それを表現するときに、そこに保育の真実があり、幼児はよりよく成長してくれるでしょう。

(元・洗足学園短期大学)

婦人宣教師、ミセス・プラインの

「おばあちゃんの手紙」(1)

～アメリカン・ミッション・ホームの

創立者の一人～

小林 恵子

一九八九年のロンドン大学で開催されたO・M・E・P (世界幼児教育機構) 大会のテーマは「The Voice of The Child」であった。そのテーマを聞いたとき、私の心にすぐ浮かんだのが、明治四年に横浜に来た三人の婦人宣教師のことであった。この女性たちは、当時、社会問題となった混血児―日本の婦人と外国人との間に生まれた子ども―の声なき声を聞いて、その養育のため米国から海を渡ってやってきた人々である。この大会で、私は「一八七一年に日本に来た婦人宣教師」と題し拙い英文で発表したのであるが、そのあと何人かの外国人から「貴方の発表された混血児の問題は今、私たちの抱えている大きな問題なのです」と言われた。

昨年末、O・M・E・P主催で「子どもの権利条約」フォーラムが各地で開催されたが、百三十年前、混血児のために日本に来た三人の婦人宣教師の功績は今改めて子どもの人権を守る視野から高く評価されるべきであろうと考える。

*

「おばあちゃんの手紙」は、ミセス・ブライン（三人の婦人宣教師の一人）が米国にいる孫にあてた手紙である。

この手紙を読者の方々によく理解して頂くためには、最初に何故この三人の婦人宣教師が日本に来るようになったか、その背景となった時代や当時の日本の女子教育と混血児の問題などを書いておかなければならない。ただし、私は『幼児の教育』誌（第八十一巻第七号）で「日本における最初の私立幼稚園とその背景（四）——横浜ミッションホーム（亞米利加婦人教授所）における女子教育と幼児教育——」と題し既に発表しているのであるが、以前のことであり、お許しを願って同じような事を最初に述べておきたいと思う。

（一）横浜に來た宣教師と女子教育

プロテスタント（新教）の宣教師が日本に來たのは、一八五九（安政六）年、日本が横浜、長崎、函館を開港して欧米諸国と貿易を開始してからのことである。

当時、欧米の諸教会は外国伝道への使命に燃え、中国、朝鮮、印度と布教を開始したが、特に米国プロテスタントの各派はキリスト教禁制下にあった日本にすぐれた宣教師を派遣した。

横浜に來た最初の宣教師には、ヘボン（J.C. Hepburn）、ブラウン（S.B. Brown）、バラ（D.V. James Ballagh）、フルベッキ（G.F. Verbeck）などがあり、この人々は日本の近代化の推進に開拓者的な役割を果たした。和英辞書の編纂、聖書の和訳、教会の設立、ミッション・スクール、病院の設立など、その活躍は多方面に及んだ。日本の医学、自然科学、文学、音楽など多くの分野がその源泉にキリスト教の影響を少なからず受けているのを知るとき、そこには宣教師が最初に小さな種を蒔いていた事実にいきあたるであろう。日本の女子教育も幼児教育も最初の種まきは宣教師であった。

さて、宣教師夫妻が日本に來て最も驚いたことは、婦人の社会的地位が低く女子教育が著しく遅れていることであつた。当時の世間一般の考えは、儒教精神にたつ貝

原益軒の「女大学」が金科玉条とされ、女子に学問が無益であるばかりか害があるとさえ考えられていたのである。こうした女子への蔑視と束縛にたいし、ブラウンは「女子教育は日本がキリスト教国の仲間入りする前にやりとげなければなりません。そして、その仕事は今すぐに始めるべきです」（註1）と述べ、女子教育こそ、緊急の事業と考えたのが、横浜に住んでいた宣教師たちであった。女子教育の草分けは、こうした宣教師たちの努力によるもので、明治三年にミス・キダーによって創立された横浜のフェリス女学院が先駆である。

（二）混血児の問題

さて、一漁村にすぎなかった横浜が貿易港として開港すると、その発展はめざましいものがあつた。輸出の主なものとは生糸と茶で、港は外国商館の人々や船の出入りで賑わい、他国の船員や商人の遊樂の場ともなつていった。ヘボンやブラウンはこの横浜を「泥沼のような社会」（註2）と述べているが、国際港として文明開化が

華やかに発展する裏面では人々の風儀がみだれ、様々な社会問題を抱えることになった。その一つが「らしやめん」と称する日本女性と外国商人などとの間に生まれた混血児の問題である。当時はとりわけ混血児に対し、忌み嫌う風潮があり、その多くは私生児として蔑視され罪惡視されただけに、こうした社会問題は横浜に住む宣教師たちの心を痛め、悩ませるものとなった。その現状を憂い、宣教師バラは米国の基督教会に混血児の救済と女子教育機関設置の緊急の必要を強く訴えたのである。

（三）当時の米国と混血児の問題

その頃、米国は一八六一年の南北戦争を機として奴隷解放運動が起こり、すべての人間は等しく人間として尊重されるべきことが強く叫ばれた時代であつた。

人格の尊厳、自由平等をかけた、人道主義にもとづく社会改良運動が活発に行われた。監獄の改良、障害者の救済と教育、貧しい人々の生活条件の改良、貧困の教育など、様々な社会改良運動が推進された。幼稚園運動も

その一つで、フレーベルの精神を尊重し、博愛主義に根ざし、貧しい家庭の子どものために無料幼稚園が各地に設立された。

こうした人道主義にもとづく様々な社会改良運動はやがて広く世界に視野をむけ、人種や国境を越え人々を援助していくエネルギーを生みだした。とりわけキリスト教プロテスタント諸教派は異教の地であるアジアへの伝道と教育への使命に燃え、アジアの諸地域に多くの宣教師を派遣した。

このような時代のなかで、米国の基督教会にバラ宣教

師が訴えた横浜の混血児の問題は、人権差別や人間の尊重を考えようとしていた当時であって、応じるにふさわしいものであった。そして、この訴えに応じたのが米国婦人一致外国伝道協会(The Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands 略してW・U・M・S)である。

(四) 米国婦人一致外国伝道協会

この協会は、東洋の婦人と子どもの伝道と教育、福祉を願い、ドリーマス夫人(Sarah Platt Doremus)を



初代会長として一八六一年、ニューヨーク市に創設された。ドリーマス夫人は九人の子どもの母であるとともにキリスト教社会事業家として活躍した勝れた女性で、彼女の関心は多くの虐げられた女性や子どもたちに向けられた。ニューヨーク市の監獄の改良や女性囚人のための家庭的なホームの設立、貧しい婦人労働者のための保育所や病院など、その活躍は多方面にわたっていた。(註3) 彼女は改革派の教会員であったが、東洋の婦人子どものために教派の違いを越え全米の教会婦人会が一致して婦人宣教師を東洋に派遣することを提唱した。こうして、超教派によるキリスト教の女性たちの手によって組織された全米で最初の女性のミッションが米国婦人一致外国伝道協会であった。

ところで、一八六〇年代の米国では、まだ女性の選挙権も財産所有権も認められず、女性たちの社会的地位も低く、その活動にも限界があった。外国伝道には莫大な資金が必要であるが、その資金集めには大変な苦勞があった。このために会員たちは、小遣いを節約して献金

し、衣服や小物、そのほか調度品などをバザーを開催して売却し、その利益を資金にまわすなど、献身的な努力を重ね続けて長期にわたって資金を拵えたのである。こうした資金についての苦勞や人々への感謝の言葉は「おばあちゃんの手紙」にも何度か書かれている。

(五) 三人の婦人宣教師

この協会は、一八六一年から要請のあったビルマ、インド、中国の北京に婦人宣教師を次々と派遣し、女学校、孤児院、婦人小児科病院等を設立した。(註4) 日本への派遣は協会創立の十年後のことで、バラ宣教師の強い要望に応じ、混血児の養育と女子教育機関の設立のため三人の婦人宣教師を派遣することになった。

三人の女性の名前は次の通りである。

* ミセス・メアリー・P・ブライン

(Mary Putnam Pruyt 1820—1885)

* ミセス・ルイズ・H・ピアソン

(Louise Henrietta Pierson 1832—1899)



ミス・クロスビー



ミセス・ピアソン



ミセス・ブライン

三人の婦人の宣教師

*ミス・ジュリア・N・クロスビー

(Julia Nelson Crosby 1833—1918)

三人のうちの最年長者はブラインであった。この女性が「おばあちゃんの手紙」を書いた筆者である。ブラインはこの協会のアルバニー支部副会長であった。そして協会のポーキプシー支部からはミス・クロスビーが、ケンタッキー支部からはミセス・ピアソンがブラインのアシスタントとして参加することになった。

三人は、いずれもニューヨーク州の出身で日本に来たとき、ブラインは五十一歳、ピアソンは三十九歳、クロスビーは三十七歳であり、W・U・M・Sの規則どおり、家庭に束縛されることのない未亡人と独身女性であった。

ブラインについては次回に詳しくのべることにして、ここではピアソンとクロスビーについて述べておきたい。

ピアソンはニューヨーク州バチスタルの生まれで、父は米国に帰化したフランス人で生涯を教育事業に尽くし

た人である。母は博学な米国婦人で両親ともに熱心な基督教教徒であった。四歳で早くも学校に入ったと伝えられるが（註5）彼女が後にその生涯を伝道と教育事業に捧げたのも両親の影響が大であったと考える。故郷のバチスタル大学を卒業後、ピアソン氏と結婚し、三人の娘と一人の息子に恵まれたが、幸せな家庭は長く続かず、二十八歳で夫を亡くし、子どもたちも次々と亡くなった。この悲しみを乗り越えようと、彼女は教育事業に力を入れることとなり、婦人宣教師として日本へ行くことに自らの使命を感じたのである。

クロスビーは大学教授ウイリアム・ヘンリー・クロスビーの長女としてニューヨーク市で生まれた。父母ともに名門の出身で両家ともアメリカ独立戦争の時の将軍の子どもであった。（註6）三人のなかでは一番若い独身の女性である。

これらの三人は協会の呼びかけに神の声を心に聞いて応じた人たちであった。

（国立音楽大学）

〈註〉

- （1）「フェリス女学院一〇〇年史」 フェリス女学院 一九七〇 7頁
- （2） 同右 21頁
- （3） Dictionary of American Biography 377頁
- （4）「横浜共立学園120年の歩み」 横浜共立学園 一九九一 18頁
- （5）「L・H・ピアソン」 近代文学研究叢書 第五巻 抜刷 18頁
- （6）前掲書「横浜共立学園120年の歩み」 23頁

庭の番人ゝはるゝ

風・音・かおり

土橋 光子

やわらかく、ふっくらとした風がとおって
いくと、桜の枝の細いさきがかすかにゆれ
る。

心が弾むような日が続くようになって、縁
側で仰向いて空を眺めていると、我が家の猫
が、長い尾をぴんと立てて、そっと体をすり
寄せてくる。尾の毛さきがふるえて、微かな
風がいっしょについてきたようです。

風って通りぬけると帰ってこないのです
ね。つむじ風でも渦を巻きながら、やっばり
いつてしまいます。何かが動くと必ずそこに
一緒にいる風、私の神経が何かを感じると風
を見るのです。やわらかいかぜ、かすかなか
ぜ、こっそりかぜ、この風たちは、ほとんど
音をださないようです。耳にとらえにくいお
となのでしょうか！ でも音は風と一緒に旅

をしていて、風のそばにいるはずだと思うのです。風と音が一緒にいるとはつきり解る時って、やや強く吹く風、荒々しい風、ひきちぎるように通り返ぎていく風、葉を散らし、鉢植えを倒し、荒々しい音と共に、無残な姿をおいていきます。でもこんな凄まじい風は、春には少ないようです。心で感じて見つけてほしいような風と音をさがして見ましょう。

桜の蕾がふくらみはじめる頃、あちらこちらで「むく、むく」という音がかすかにして見る間に花芽が開きはじめます。やわらかい風にさそわれるように、しつかり重なりあったいた萼が囲みをときはじめると、薄紅色の花びらをのぞかせはじめます。二週間ぐらいで二分咲きぐらいでしょうか、それから二週間ぐらいで満開です。

九一ねん四がつ。

春風にさそわれて散る頃になりますと、急に通りがにぎやかになり、風にのっているいろの音がはこばれてきます。

朝です。「きれい」。足音が止まって少しの間かすかに人の動く気配があつたが、又忙しく去っていきます。タラッタ、タラッタとスキップをするような軽い小さな靴の音です。止まると何かを追いかけるような音に変わって、桜の木の下を往ったり来たりしています。この時期から朝の日課の庭掃きがだんだん忙しくなります。桜の散るやわらかい音、さつ、さつ、と道を掃く箒の音、車の輪の下敷きにならないうちに、なるべく早く集めてやりたいと心がせきます。夜から朝にかけて散った花びらです。可愛らしいピンク色の小さい山ができました。幼い人たちが砂山をつ

くるぐらいの、花山です。そつと側溝へ片寄せておきましょう。スキップの靴音が通ったら、きつと止まって、両手にすくって、又ぱつと散らしていくのでしょうか……。

満開になった頃、ポツリ、ポツリ、雨です。ひと雨くると花には終わりが近づいてきます。毎年のように繰り返される花の季節の美しいさまがわりの時に聞くおと。ぽつと生まれてきて、盛りを迎え、かぜと遊んで、はしゃいでは野鳥を呼び集め、蜜を与えるのに、チクリと蜜ぼうのところから喰いちぎられて丸ごと散っています。小さな靴音がして四・五人の女の子が散り敷いた花びらに駆け寄ってきます。

「わあ、ぜんぶはなびらがついている！」
そつと手のひらの上にのせ、ハンカチを出して包む、やさしい音がきこえるような光景

です。

それから一週間ぐらいい後、本格的にハラハラと散りはじめます。ささっ！ と吹くと大変なさわぎです。花びらの騒ぎなんて聞いたことがありませんか？ 静と動の音が同時に入りまざって聞こえてくるのです。昔の人はおともなく桜の花が散るとめでた人もいました。心の中で静音をきいて楽しんだのでしょうか？

かすかな風に誘われて一枚一枚わかれていく花びら、学校帰りの低学年の女の子が両手を広げて、くるくる回るようにおどると、花びらは大急ぎで、そよ風にのって舞い上がります。隣の子がそれをつかまえようと追いかけています。散らす、追う、舞い上がる、つかまえる。ほんのひと時の騒がしさですが、確かに楽しい音が聞こえてきます。つい誘われ

て外に出ていきますと、驚いて、はにかむように花を見上げてしまう眼。

「つかまえられた？」黙って首を左右にふる。

「おばあちゃんの大きな手でもだめかしら！」

私もつい夢中になって行動をおこすと、子どもたちも又おいはじめる。

「あつ、とまった！」「おばあちゃんのあたマ

「ほんと！」と、しゃがみこみながら子どもの方に頭を出す。小さな指が私の髪の上からそっと一枚つまんで渡そうとする。

「もらっていつて！」

「いいよ！ またつかまえよう！」

片方の手を広げて走る。風も、音も、動きも全部がごちゃまぜになって過ぎていった数分

間でしたが、明るくて、さわやかな、花の下の出来ごとでした。子どもたちはランドセルをカタカタいわせながら「さよなら又あした」「さよなら、又ね！」

次の朝は雨でした。学校帰りの頃になると、散った桜の花びらが側溝に花筏のように並んでゆるゆると流れていました。春のひと時が終わろうとしています。

風と音とかおり、などと書いたのですが、かおりにふれていません。桜の花は木の上ですのどほんとにかすかな匂いです。

子どもの両手一杯に盛られた花びらからならかぎとれるでしょう。風と音に夢中になっていた私は、両手に自分達の鼻を近づけてみることを言いませんでした。ハンカチ一枚に包んでそっと持ち帰った花びらが、ままごとのご馳走にでもなった時、そっと匂いを感じ

てくれればと願いました。

自分の五感をとおして伝わってくる、風・音・かおりなどを心の深いところまでとらえられるようになったら、そこに私の前進があると思います。

違う環境に入ってしまった今、私の周りを

通り過ぎていく小さい人たちと、何時までもつながっていられるかすかな風のような気がします。風は何処からともなくやってきて別れていきます。でも又新しい風を迎えられるように心を澄ましていたいと思います。

(元・武蔵野相愛幼稚園)



遊ぶ権利を奪われている

子ども達の現状

菊池 百合

「とても一緒に暮らせない。このままだと、私はこの子の首を締めてしまうに違いない。」

平成三年五月に開設された「子どもの虐待一一〇番」

の相談例です。電話をしてくる母親は、決まって「わが子がかわいいとは思えない」と、もらすという。また「子どもは好きだけど子育ては嫌い」という母親もいるし、周囲の母親たちを、子育ての競争相手と考えて、子どもに過度の要求をしているらしい。

子どもの権利条約第一部五条(親の指導の尊重)に、

「『子どもの能力の発達と一致する方法で適当な指示および指導を行う責任、権利および義務を尊重する。』と述べられています。

一人ひとりの能力は違い、育児書通りに子どもは育ちません。子育てはすべて育児書の応用問題でなければなりません。本の通りにしようとする母親のせり、虐待に結びついてしまうのです。いくら教えても、おむつがとれないからと、「私はダメな親なのか」と自分を責め躍起になり、やがて、子どもへの恨みが芽生えてしま

うのです。「なぜ私の努力にこたえてくれないの」と手を振り上げてしまう結果にいたるようです。

核家族化が進み、一日中、母子だけの生活、育児書を頼りの、「孤独と不安の子育て」から生ずる母親の子どもへの虐待が問題になってきています。

この稿では、身体的暴行や、保護の怠慢・拒否などのように、虐待として認識される重度のものではなく、それ以前の、日常生活の中で意識せずに進行している『遊ぶ権利を奪われている子どもたちの現状』に焦点をあててみたいと思います。

子どもの権利条約の前文に「…子どもが、人格の全面的かつ調和のとれた発達のために、家庭環境の下で、幸福、愛情および理解のある雰囲気の中で成長すべきであることを認め…」と述べられていますが、十分な遊びの体験をせずに子ども時代を過ぎてしまうことは、子どもたちにとって不幸なことです。

△過密スケジュールの子どもたち▽

「今日 あいてる？」

「わかんない。家に帰ってから電話するよ！」

まるで、サラリーマンの会話とも思えそうな内容にもかかわらず、これが幼稚園から帰る時に、友だちとかわす会話なのです。その日の日程は家に帰らないとわからないほど複雑であり、自分の意思では決定できない状況なのです。その上、連絡方法は電話なのです。

「今日 遊べる？」 だった頃の方が、まだ良かったのかもしれませんが、約束をしていないと一緒に遊べないような状態に違いありません。

それほど忙しい子どもたちの日常です。大人なみの過密スケジュールの中にいて、子どもたちは遊びを失ってしまっています。子どもだからこそできる遊び、子どもでなければできない遊びを体験せずに、大人の仲間に入ってしまったて良いのでしょうか。

△親子で過ごす時間の減少▽

『一九九一保育白書』の、「乳幼児をもつ家族の生活と

子育ての意識」によれば、五歳の子どものほとんどが保育所や幼稚園などの保育施設で過ごしていると報告されています。保育所や幼稚園などの保育施設で過ごしていない子どもは、母親が働いている場合には約一%、母親が働いていない場合は約三%ということです。

それにもかかわらず、習いごとや塾に行っていない子が、母親が働いている場合には五五・四%、母親が働いていない場合三四・一%のみで、他の子どもたちは習いごとに通っている実態なのです。

長時間、親から離れていた保育所で過ごした子どもの約半数が、保育所から帰ってからさえも、家庭で親と過ごしてはいないのです。自分ができなかったことをさせてあげたい親心とはいえ、親の過度の期待にむくいるべく、子どもたちは特訓を受けに行くのです。しかし、子どもたちが求めているのは、親とのかかわりなのです。

△子どもの頃、こうしてほしかった▽

K女子短大保育科の学生が、自分の子どもの頃をふり

かえて、「子どもの頃、こうしてほしかった」と記述したものとすると、最も多かったものが両親の共働きに関することです。母親が働いていたという表現の学生もありましたが、約三割の学生がそれを話題にしました。

子どもにかかわる時間を持つことは難しかったろうとは理解しているものの、物だけを与えられるのではなく、直接ふれあう時間がほしかったという主張が大部分でした。母親の職場進出そのものを否定しようとは思いませんが、子どもにとっての母親の役割は無視できません。

* 両親が働いていたため、幼稚園に入るまでは、日中はいつも一人だった。母と散歩や買い物にいたり、家の中で洗濯物を一緒にたたんだり、ごっこ遊びがしたかった。

* 毎日ゆっくり話を聞いてほしかった。幼い頃、専業主婦の友だちのお母さんをとてもうらやましく感じていた。

* 母親が働いていて、子どもの頃は、ただ遊具を買って与えられただけだったので、母親と一緒に遊び、歌や手遊びを直接教えてほしかった。

* 両親が共働きで、祖父母に育てられ、とても可愛がってもらいました。ほしい物はなんでも買ってもらい、だいぶわがままに育ちました。祖父母には感謝しなくてはいけないのですが、もう少し厳しく育ててくれていたらと思います。

* 母は私が幼稚園の頃も働きに出ていたので、鍵っ子でした。顔を合やす時間が少なく、一緒に遊ぶ時間もありませんでした。「ただいま」「おかえりなさい」の会話がほしかったです。

* 母は会社勤務していた。家事と両方のかけもちで大忙しで、そのせいか短気ですぐ怒ってしまふ。やさしく接してくれたこともあったが、もっと余裕をもって生活していれば、子どものことをゆっくり見守ることができたのではないかと保育を学び思った。



これは現在の子どもも同じことでしょう。

〈習いごとではなく、一緒に過ごすことを〉

「乳幼児をもつ家族の生活と子育ての意識」によれ

ば、習いごとの御三家はスイミング・ピアノ・習字という結果ですが、それに費やす時間を、親子で過ごすことはできないものでしょうか。オリンピックの選手や、ピアニストや書道家にしようというなら無理でしょうが、小学校で困らないようにという程度なら、人まかせにスイミング・ピアノ・習字などをしなくとも、親が子に遊びを通して教えてみることも可能でしょう。

おけいこごとよりも、遊びの方が子どもには楽しいこととは当然ですが、幼児産業の甘いさそいかけに抵抗を示し、近所の子たちが習いごとに通っているのに、親子で悠然と遊んでいる勇氣を持てるほど、自分の子どもに自信がいただけないのも現状でしょう。

幼稚園や保育所などが、率先して地域における親の教育を推進する必要があります。まず、初めは遊びの楽しさを取り戻す刺激をすることでしょう。

Y幼稚園のクリスマスを見せいただきました。公会堂などで大々的に行うものではなく、保育の一端としての行事であって、笑い声のたえない和やかで楽しいもの

でした。すべてが毎日の遊びの延長であり、さしたる練習の必要のない内容ばかりでした。

その一つは、子どもが作った話を身体で表現したものです。子どもは話を作った過程で、登場する者の姿や動きは、はっきり自分のイメージにあるのです。それをそのまま表現するだけでしたが、大人から見ると新鮮そのものです。

親子のゲームも、向かい合って座り、親子で両手をつないでの船こぎです。「おふねはぎゅちらこ…」と歌った小さい頃を思い出しなつかしく感じました。しばらく親子でした後は、二組の親子が大人の船の中に子どもたちを入れてこぎました。単純な遊びにもかかわらず、満足な顔の子どもたちが印象的でした。家に帰ってから、きつと両親の船に子どもが乗り同じ遊びをするだろうと想像するとはほえましくなりました。

ほんの数分、親子で船こぎをするだけならば、仕事に疲れて帰宅した時でも可能でしょう。特にお父さんの船は子どもに安定感を与えることでしょう。

△何もすることがないから、テレビを見る▽

子どもの時間を奪うのは習いごとだけではありません。

表1は、T保育所の二、六歳の子どもたちの、就寝時刻とテレビ視聴時間の関係の調査です。

年齢別に見ると、年齢が高いほど視聴時間は長くなっています。

五時ごろ保育所から帰って、九時に寝るまでの間に、四時間もテレビを見るということは、帰ってから寝るまでずっとテレビを見ていることになり、夕食も見ながら、入浴はコマースシャルの短い時間にする計算になります。これでは家族そろって食事をしながら、団欒の時間をもつことはとても不可能です。

最も多い九時就寝、二時間テレビ視聴の子でも、夕食と入浴に各々約三〇分とすると、残りはわずか一時間だけです。これもすべて遊べる時間とは限りません。保育所の子たちは、家の外で友だちと遊ぶ時間はほとんど残っていないという状態のようです。

表1 就寝時刻とテレビ視聴時間

時間 時刻	～ 1	～ 2	～ 3	～ 4	不明	計
～ 8	2	3				5
～ 9	14	21	15	4	1	55
～10	4	5	9	2	1	21
～11		1	1			2
11～			1			1
計	20	30	25	7	2	84

その上、習いごとが入ると、かなりのハードスケジュールをこなすことになります。

自分で小さい頃あまり遊んでいないために、子どもとのかかわり方がわからない親にとっては、好都合ともいえませんが、子どもはいつも自分から積極的に求めて何かをしようとはせずに、受け身の状態で過ごせばいいことになります。こんな子どもたちが、週休二日にどう対応するのでしょうか。また、それにかかわる親はどうするのでしょうか。次に習いごとをみつけるという結果になってほしくないものです。

親子とも気づかぬうちに、子どもの生活を束縛しているのです。

△共有の遊び場・大勢の友だち▽

前述のK女子短大の学生が、「子どもの頃ここが良かった」として記述した内容には、共有の遊び場・大勢の友だちについての事例が多くあります。公園や神社やお寺などにいくと、必ず沢山の友だちがいて、約束をし

ていなくとも、男女の区別なく、異年齢集団で遊べた。大人があまり来ない秘密の場所や、内緒の遊び場があったのです。昭和五十四年に小学校に入学した年齢ですから、当然テレビは生活の中にあっただにもかかわらず、体を動かす集団遊びを体験しているのです。

＊ 公園に行けば、小学校の高学年までのお兄さんやお姉さんがいて、その公園にいる子どもたちが一緒に遊んだ。一番小さい子は「みそっかす」になって、年上でリーダーになる人は、年下の子が不利にならないように考えてくれた。危ないことをしていると大きい子や、近所の人が注意してくれた。

＊ 木登りなど大人の目からすればあぶないことや、いたずらも沢山した。まわりの自然はすべて遊び道具だった。

＊ 兄やその友だちと一緒に遊んだが、仲間はずれにされなかった。野球にも山登りや探検にも一緒に連れていってくれた。

* 空き地のブルドーザーに登ったりして遊んだ。今、考えると恐ろしいことをしていた。今なら工事用の車が置いてある所では絶対遊べないし、おじさんが頭を下げている絵の看板が立てられていて「入ってはいけません」と叱られる。

その他、ザリガニやオタマジャクシをつかまえては、自分の目で成長を確かめたり、服をどろだらけにした、毎日が充実していて、暇がないほどだったといっています。

家の外で友だちとかかわり思う存分遊び、自分の意思で時間を使っていた学生たちの子どもの頃に比べると、今の子どもたちは、同じ時間を、限られた場所で管理されてすごしているといえるでしょう。

△家の中で母子四人ひっそりと過ごす▽

四歳の双子の兄弟。二つ上に兄がいる。兄が三歳児健診で「ちょっとおかしい」と再検査をするように言われ

た。父親はうちの子は身体も大きいし正常だからと、無視してしまった。下に双子がいるため母親は外に散歩に連れ出すこともできず、兄が幼稚園に入園するまで、家の中で母子四人ひっそりと過ごしていた。

言うことをきかないと手を上げ、自分の思い通りにさせたいと、すべてやってあげていた。四歳になっても、自分で食べることが苦手で、口をあけて食べ物を入れてもらうのを待つ。父親は母親以上に厳しく、子どもたちは、父親に似た人の姿を見ただけでかくれてしまうか、「ごめんなさい。ぼくわるいことしません。」「ぼくもうしません」と泣きながら言ったりする。

両親とも、失敗させまいとする気持ちが強い。子どもの気持ちをわかろうとするよりも、自分の思い通りしたらしい。兄が幼稚園に入園し、園長先生から子どもとのかかわり方を教えられてから、少しずつ子育てに前向きになってきたが、まだまだ時間がかかりそう。

かわり方がわからずに拘束しているだけで、自分たちのストレスを弱い子どもに発散し、子どもをおびえさ

せている両親に、親としての自覚を育てることも幼稚園や保育所の役割になってきています。

△自信喪失からの脱却を▽

「日米中学生・母親比較調査」（日本青少年研究所・一九八五年報告）によると、中学生に「あなたのお母さんは、あなたのことを自慢に思っていると思いますか」とたずねて、「はい」の回答が、日本二三・六％、米国九二・〇％という圧倒的な差です。子どもが極度の自信喪失を示しているのです。

母親の方に、「あなたは、お子さんを誇りに思いますか」とたずねた結果は、日本七二・九％、米国九六・一％で、子どもほどではないが、やはり日米の差は大きい。

自信があれば虐待はないとは短絡的に結論づけるつもりはないが、子どもが過ごしくなっている現在、せめて幼稚園や保育所は子どもの収容所ではなく、子どもの権利条約第一部第三十一条にあるように「…子どもが

文化のおよび芸術的生活に十分に参加する権利を尊重し
かつ促進し、ならびに、文化的、芸術的、レクリエー
ションのおよび余暇的活動のために適当かつ平等な機会
の提供を奨励…」する場でありたい。

参考資料

『子どもの人権読本』子どもの人権連他編集 エイデ
ル研究所

『一九九一保育白書』全国保育団体連絡会他編集 草
土文化

『子への虐待』読売新聞 平成三年十二月十七日
『子育てに夢と豊かさを』菊池百合著 エイデル研究
所

（洗足学園短期大学）

思い出の中の保育(6)

“人とのかわり”の

難しさ

守永 英子



新しい教育要領では、“人とのかわり”が、大きな柱の一つとして取りあげられるようになった。小さな子どもたちにとって、“いかに人とかかわるか”は、早い時期から出合う課題であると同時に、大人になっても、乗り越えていかなければならない、いつまでも続く課題である。そして、生活の中で、それをどのように体験していくかが、その力を育むことにつながっていく。といっても、生活の中の具体的な場面で、“人とのかわり”をどのように捉え、どのように育てるかは、複雑多岐にわたっていて、そう簡単なものではない。

家庭から幼稚園に入園してくる子どもたちに対して、保育者としては、その初期の出会い

いが、子どもにとって心楽しいものであってほしいと心を砕く。子どもが安心して、思うことができるように支え、子どもの中に、大人は自分を支えてくれるものだという信頼感を根づかせたいし、子ども同士の関係の中では、お互いの気持ちが伝わり合ってうまくいくように援助して、互いの触れ合いが快いものであることを体験させたいと願う。しかし、保育者がどんなに願っても、どうにもしてあげられない状況もある。

三歳児クラスでのこと、昼食のあとで、子どもたちのほとんどは、庭に出て行って、保育室の中は閑散としていた。M子は、部屋のままごとコーナーで遊び始めようとしていたが、誰か一緒に遊ぶ相手が欲しかったのであろう。保育室の入口に、N子とY子の二人の姿を見つけ、とんで行った。Y子は、M子がよく一緒に遊ぶ相手である。M子は大喜びでY子の手を引っぱって、「Yちゃん、おまますことしようよ」と言った。N子は、慌ててY子の手をしっかりと握り、M子の手を振り払った。「だめ、Yちゃんと一緒に、お山に行くんだから」

園では、庭に続いて小高くなっているところをお山と呼んでいて、庭から山へは、植え込みの間の道を通って自由に行けるようになっていたが、不思議と、子どもたちは、「お山に行ってきます」「お山に行ってもいいですか」と、ことわって行くことが多い。N子とY子も、「お山に行ってきます」と、ことわりにきたところであつたらしかった。そこへM子の割り込みに会って、N子は激しく抵抗し、二人でY子を引っぱり合い、叩き合いになった。Y子は、二人の間で、困惑の表情で立ちすくんでいた。

子どもたちのおべんとうの後始末をしながら、事の成り行きに気づいていた私は、何とかしなければ……という思いに焦った。

M子とN子は、二人とも、はっきりした、強さをもった子どもたちである。一方、Y子は、おっとりした、やさしい子どもで、二人が、自分の遊び相手としてY子を選ぶのも、もつとも思えた。

どうしたらよいだろうかと思案しながら、私は、ゆっくりと三人に近づき、Y子に尋ねた。「Y子ちゃんは、どこで遊びたいの？」

M子とN子には、Y子にもY子自身の気持ちがあることを知って欲しかったし、Y子には、自分の気持ちをはっきりと表現して欲しかった。「誰と遊びたいの？」という問いでは、選ばれなかった子どもの気持ちが傷つくと思うと、私には、Y子に場所を選ばせるより他の問いは、思いつかなかった。

「おそとで遊びたいの」 Y子は少し困った様子で、しかし、はっきりと答えた。N子は喜んで「じゃあ、お山に行こう」とY子を誘い、M子は、「もう、お部屋にきても、おままごとには入れてあげないから」と憤った。

二人が庭に去ったあと、M子は、ままごとコーナーに戻って行ったが、怒りは、なかなかおさまらなかった。

おそらく、私が、ままごとの相手になってあげたとしても、怒りはおさまらないに違いないし、何か声をかけることが、かえってM子の怒りを活性化させてしまうことを恐れ

て、私は、黙って昼食のあと始末を続けながら、じっと、N子の怒りがおさまるのを待った。

ひとりっ子で、今まで自分の思い通りになることが多かったと思われるM子には、少し敵しすぎる試練かもしれないが、私には、何もしてあげることができなかった。できることは、ただ、憤っているM子の怒りがおさまるまで、一緒にいてあげることだけだった。

激しい怒りの中で、M子は、何を体験しただろうか。Y子は……N子は……。

三人の子どもたちそれぞれに、私の思いが通じたであろうか。

保育の中の小さな一つの出来ごとの体験が、その子どもの中にどのように結果したかは、定かではない。しかし、幼稚園期を終わる頃の、明るい、のびのびとした生活、友だちとの触れ合いを目にするとき、一こま一こまの体験が、子どもの発達にプラスしてきたことの確信が、やっと持てるような気がするのである。

(元・お茶の水女子大学附属幼稚園)

遊びのスクランブル交差点 (2)

「おやすみです」の多い おみせやさんごっこ

仲 明 子

◇「おやすみです」の多いおみせやさんごっこ

我が家の六畳で、昨冬遊ばれた「おみせやさんごっこ」は、まず、テーブルを広げておみせをつくり、その上におもちやを並べて、二枚の看板、「〇〇やさんです」・「おやすみです」をつくることで始められた。

けれども、各々のおみせにまず出されたのは、「おやすみです」の看板だった。そして、その「おやすみです」のなんと長いこと。

おみせやさんごっこなのに、どうしてこんなに「おやすみです」が多いのだろうか。

子どもたちが、この遊びを「おみせやさんごっこ」と名付けたとき、私がこの遊びに抱いたイメージは、お金を持って売り買いするもので、おみせが開いていることを前提にしたものだった。

だから、私には「おやすみです」では「おみせやさんごっこ」はまだ始まっていることにはならないように思われた。

けれども、子どもたちの様子を見ると、「おやす

みです」もおみせやさんごっここのうちのようなのである。

彼らは、この遊び——「おやすみです」の多いおみせやさんごっこ——の中で、どんなことを楽しもうとしたのだろうか。

それを、まず、彼らと私の「おみせに抱くイメージ」のずれを手がかりに、彼らにとって、なぜ、おやすみが多くてもおみせやさんごっこなのかを探ってみようと思う。

つぎに、その「おやすみです」の各々のおみせの中で、彼らがどんなことを楽しんでいるのかをのぞいてみようと思う。

そうすることで、彼らにとって、なぜこの遊びにこれだけ多くのおやすみを採り入れることが必要だったのかを、探ることができるのではないかと思われる。そして、それは、この遊びがさらにメンバーに共有される遊びとなっていく過程をみることもなるう。

◇「おみせ」のイメージ

(1) Nの場合

朝、兄の登園を送って駅への道を急ぐ

N おかあさん きょうは くすりやさん おやすみ？
私 うーん まだ 開いていないだけよ。くすりやさんのおばさんも きっと 自分のおうちで 朝ごはんを食べているのよ。

N ふーん。

駅からの帰り道、開いているおみせの前で

N おかあさん きょう くすりやさんで 何か買うものない？

私 きょうは……ないわね。

N 寄りたいな！。

この二つが薬屋さんの前を通るとき、何回ともなくかわされるNと私との会話である。

薬屋さんには子どもの喜びそうなものがたくさん用意されている。うさぎ、ぞう、かばのマスコット、ときにはアンパンマンの人形、トンボのバッジや花火、ふうせん、鉛筆……。Nは今日は何がもらえるだろうとワクワクしておみせの入口に入る。Nにとって、薬屋さんはそんなおみせである。

買い物に行く大人とは違い、Nにとって関心があるのは、自分にも関心を示してくれ、何かおまけをくれるおみせである。

ところが、そのおみせには定休日もあるし閉店時間もある。そして、開店時間より閉店時間の方が長いのである。だから、Nがシャッターの降りているおみせの前でガックリすることは案外多い。

大人である私は「お店」とは開いていて買い物ができる状態のことであり、閉まっている状態では建物ではあっても「お店」ではないと思っていた。

けれども、Nにとって「おみせ」とは、開いていることも閉まっていることもあるけれど今日はそのどちらだろ

うと思いつながら通りかかるものであり、(そこまで行ってみて)開いていたら何かがもらえるが閉っていたら何ももらえないものである。

このように、開いていてあたりまえと思っている私と、開いているのも閉まっている(『おやすみ』)のもどちらもおみせの姿と思っているNとは、おみせに抱くイメージが随分違っていることに気づかされるのである。

すると、六畳に集まった子どもたちが、おみせに「おやすみです」の看板を出して、おみせやさんごっこを始めたとしても不思議ではないように思われた。

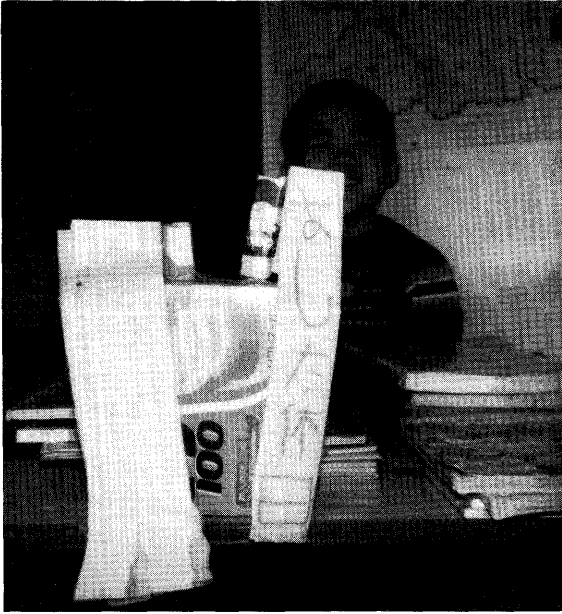
(2) Lの場合

私はNやCに求められるままに、「おやすみです」の看板を書きながら、どうして、この看板をつくるのだろうか、なぜ、この看板がかかれるほどに、子どもたちにとって「おやすみです」が重要なのだろうか、と不思議に思ってみていた。

そもそも、この「おやすみです」の看板は、おみせや

さんごっこの始まった日に、本屋さんになったLのテーブルの上に置かれたものに由来している。(写真)

この日、Lは本をテーブルの上に並べ終わると、開店するのではなく、空き箱置き場からマーガリンの空き箱



▶「あしたは金よう日だから ほんやさんおやすみだよ」

を持って来た。そして、何やら一生懸命つくり始めたのである。

まわりで自分のおみせづくりをしていた他の子らも私も何ができるのか興味深く見守った。そして、おやすみをみんなに知らせる立て札とでもいうべきものができ上がったのだった。(図1)

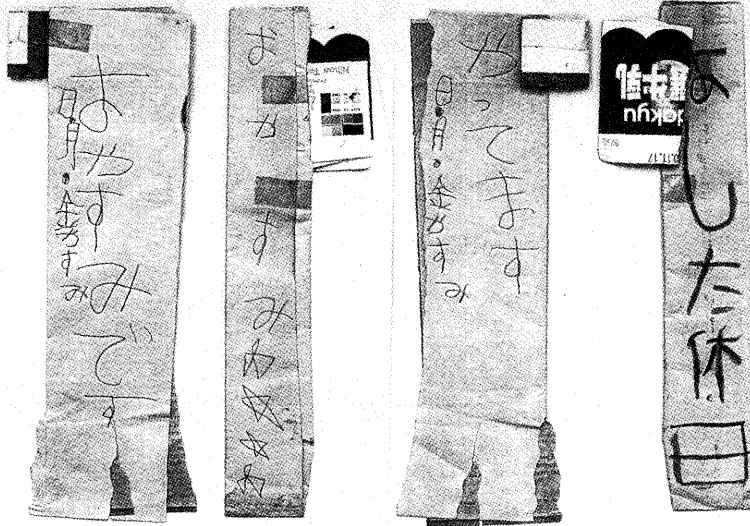
Lは、その立て札の表裏左右の四カ所のいずれにも「やすみ」の文字を入れて「おやすみ」について知らせている——「やってます」(表)にも、「おやすみです」(裏)にも「日・月・金やすみ」が付されている——さらに、「あした休日」だけは赤いクレヨン(他は鉛筆)で太く力強く大きく書くという念の入れようである。

それを見た私は、それは、Lにとっておやすみがそんなにも大事なことの現れであろうと思った。

Lが思うおみせとは一週に四日開いて三日が休みである。なんと休みが多いのであろう。

けれども、まわりで見守っていた子どもたちは、誰一人Lにそのおやすみの多さについて疑問も異論も唱えな

◀ 図1 Lのほんやの立て札



裏 左

右

表 左

右

かった。それどころか彼らは、早速、紙と鉛筆を持って来て、各自のおみせに出す立て札を各々工夫してつくり始めたのである。

こうして、おみせにはおやすみがあり、それをみんなに知らせたいというLの立て札は（看板に姿をかえて）他のメンバーにも受け入れられたのである。

そして、ついに、共通の看板「おやすみです」が「○おやすみです」に並ぶものとしてどのおみせの前にもはられることになったのである。

私は、これは彼らがおみせに抱くイメージ——おみせにとって、おやすみは開いているときと並んで大事なものである——の現れであると思った。

では、彼らは「おやすみです」のおみせの中で、どんなことを楽しんでいるのだろうか。各々のおみせの中をのぞいてみることにしよう。

◇「おやすみです」のおみせの中

(1) 準備を楽しむ

れすとらん NとCは「れすとらん」の準備をしている。ま

まごとの棚から食器をお盆に載せてつきつぎに運んで来る。

電話、レジも置く。そして、準備が整うと、「おぼちゃん

れすとらん あいたよ 来て。」と別室にいる私は、お客として呼ばれるのである。

「おみせやさんになる」とは、自分の好きなおもちゃを一種類選んでそれをその日一日独占することとも言える。NとCは毎日のように遊んでいるまごとの道具を棚から出して来て、テーブルの上に並べる。それをする事が三歳児の二人にはすでに遊びである。

さらに、れすとらんを開いて、私を呼んで一緒に遊ぶうと思っている。だから、その準備も楽しみにいそいそと行われるのである。

(2) 自分のイメージを追求することを楽しむ

あめだまや あめだまやだったその日、Lは半裁の紙を持ち

出して来て、鉛筆で左すみから書き始めた。1コ50円・2コ

100円・3コ150円……えんえんと書き続ける。あめ一つ分の50

円ずつ足していく。Lにはそれがおもしろい。「何？」と他

の子がのぞきに来る。……8コ400円 とうとう紙が足りなく

なる。そこで、セロファンテープで右側に別の紙をつぎ足し

てさらに続く。9コ450円……14コ700円。やっとLのイメージ

したあめだまやの値段表ができ上がったらしい。もう少しで

五時になる頃、Lのあめだまやは開店した。(図2)

くすりや Lの値段表づくりを見ていたTは、くすりやにな

ったその日、Tのイメージする値段表をつくった。それは

薬ビンの絵と値段の数字を並べたものだった。でき上がっ

て、「くすりや あいたよ。」とTが叫ぶ。まわりにいた子が

やって来て、絵と品物を見比べる。日頃、「おいしやさん

ごっこ」で使われるそれらの中には、聴診器や救急箱、水枕

にアルコールやカルシウムなども混じっていた。(図3)



鉛筆で文字や数字を書くことは、入学前の五歳児にとって新鮮なことである。そのことがすでに一つの遊び

あめだま 92450円

1コ50円	5コ250円	10コ500円
2コ100円	6コ300円	15コ500円
3コ150円	7コ350円	20コ600円
4コ200円	8コ400円	25コ750円

▲図2 Lのあめだまの値段表

▼図3 Tのくすりやの値段表

10000	10000	
500	→	
3000		
500	→	1000
100	→	1000

なのである。

TとLは三年半にも及ぶ遊びを通して、六畳にあるおもちゃもお互いによく知っている。けれども、二人でいることで互いに刺激され、毎日の遊びに新しさを生み出して来た。

その日も、LはLらしく計算をしながら値段表づくりを始めた。すると、隣のテーブルでは、TはTらしく絵と数字を使って値段表をつくった。Tはてきぱきと。Lはじっくりと。早速開店したT。納得がいくまで自分の

イメージを追求しているL。そこには互いにかかわりを持ちながらも、Tの楽しみがあり、Lの楽しみがある。

とりわけ、Lのおみせは「おやすみです」のことが多い。本屋の立て札づくり、あめだまの値段表づくりのように。Lはそれに没頭している。それは別の遊びと言った方がいい。

けれども、まわりの子らはそれをせめるでもせかすでもない。「あめだまやはどうな風になるのかな。」と興味深く見守り「あいたよ。」の声のかかるのを心待ちにしているのである。

(3) 安心に支えられて自分らしさを楽しむ・それを見せる

おりがみや Oのおりがみやは昨日までは、おりがみを色とりどりに並べて売っていた。今日は、つるを折って売るという。しばらくして行ってみると、三羽のつるがテーブルの上に並んでいた。まだ、「おやすみです」。

OはNと遊ぶ妹のCと一緒にこの秋頃から六畳に来るようになった。まだこの部屋にも、Nの兄であるLやその友人Tともなじみが薄い。(このTとOの六畳での出会いが私にスクランブル交差点を連想させた)その上、男兄弟がいないのでこのように男児と同室で遊ぶことも珍しい。けれども、まだなじみの薄い彼らとは、テーブル一つ隔てていることで安心感に支えられている。

Oは自分が好きで得意な折り紙のおみせを選び、昨日まではただ並べることが楽しかったおみせづくりも、今日はつるを折って売ろうとしている。五歳児にとって「つる」を折ることは難しい。Oにとってそれは十分に楽しみであり、一つの遊びである。

「おやすみです」は、おみせやさんごっこの遊びの中にOの楽しみ——折り紙を折る——を可能にした。Oはテーブル——安心基地——の中にあって折り続ける。彼らとおしゃべりに花を咲かせながら。彼らの視線を体に十分感じながら。

OはそんなOらしい自分の姿をTやLにも見せることができた。また、彼らが彼ららしく店づくりを楽しんでいる姿をテーブル越しに見ることもできた。

私はこの互いの自分らしく遊ぶ姿をテーブル越しに見ることは、スクランブル交差点に遊ぶ彼らにとっての「かわり」ある遊びの始まりであり、彼らがこの遊びの中で一日一日なじんでいく過程でもあるように思われた。

それは彼らがこの遊びの中に「おやすみです」の看板を採り入れたことで可能になったのだと思う。

*

このように、「おやすみです」のおみせの中では、各自が思い思いに開店の準備をしている。それは、早くおみせを開けて売ることを楽しみたいと、並べることに忙しいおみせがある一方で、その準備がいつ終わるともわからないおみせもあるのである。

彼らには「おやすみです」の看板を出していることで

この遊びのメンバーであるという安心感がある。その安心感に支えられているからこそ、じっくりと各々の自分の楽しみを追求することができたのである。

私はこのテーブルの中のひとりひとりの違う楽しみに出会うとき、まず各々の安心基地とも言えるテーブルの中で自分のやりたいことを十分にやり遂げることで、メンバーのひとりとして自信を持って自分らしくかわって遊ぶことができるのだと思う。

「おやすみです」の看板は、おみせやさんごっこの遊びの中にあって、そんなひとりひとりの楽しみ（別の遊び）を可能にしたのである。そして、彼らが互いのそれをテーブル越しに見る機会をも保障したのである。

それは、彼らが互いになじんでいく過程としても必要なものであるように思われた。

（舞々同人）

名を告げ合わず

モーレンカンブふゆこ

人に初めて会う。ハウドゥユードゥ。お国はどちらですか。何年オランダに住んでいますか。なぜお国を出たのですか。御主人とはどこで会ったのですか。何の仕事をしていますか。日本が恋しくはありませんか。何年前に里帰りしましたか。日本の御家族は、お友だちは、お子さんは……いったい何度同じ答えをくり返したことだろう。紙に書いて首にぶらさげてでもおけば、どんなに楽だろうかと思う。

それでも身分証明書的な事実をならべるだけならいい。国を出た動機や、オランダに流れた道程やら、まして日本への愛憎やらをくどくどと話すと、ややこしくなる。その上めんどいな事には、動機づけや考え方が長年のうちに変わってきて、知らないうちに美化してしまう。質問につじつまが合うよう答えていると、自分が何者であるのかわからな

くなり、自分で自分を創り出してしまったことも何度かあったろう。私は本当はこういう者ですと、わかってもらえたら、という願いは、外国に居れば格別である。本を書きたいという願いの底には、それがパスポートであり、それさえあればどんな国境も無事通過できると思えるからである。

白夜の砂丘は美しい。砂丘といっても草原のようなもので、海岸線に沿って作られた防波堤である。そこで手を広げて鳥のように丘を駆け下りるのが私はたまらなく好きだ。しかしこの砂丘で一番恐いのが犬である。手を広げてすうっと飛んでいる私に、一目散に突進して来たりするので、空に舞い上がれない私は仕方なく彼方を見る真似をして立ちくむ。犬がずうずうしくおいを嗅ぐ間、生きた心地もせず、時にはキャンキャンと、ちびのくせに大ボラを吹く奴もいて、せっかくのいい気分がすっかり台無しになってしまう。

子供達が一緒だと、そこところは何とかうまくやってくれて、犬が見えたとなんに、「ママ、大丈夫だよ。恐がる場所を見せちゃダメだよ。犬はすぐつけこむから。」と言いい、犬が寄ってくれば

「ハイ、ホンチェ（犬ちゃんこんにちは）」と撫ぜたりすれば、たいていの犬はすぐおとなしく行ってしまう。

あの日、私は一人で砂丘に鳥に行行った。飛びまわってもとってきた砂丘の入口

に、いつもみる大きなシェパードが座っていた。ライオンのような威厳と優雅さを見せて……あの馬を飼っている家の番犬に違いない。

私は道をはさんで犬と対座した。「克服するということは、一番恐ろしいことに挑戦することだぞ。」と自分に言いきかせて、試みに「ハイ、ホンチェ」と小さな声で呼んでいた。

すると何としたことか、その犬がつと立ち上がり、私の方にゆっくりと歩いてくるではないか。しまった！ 犬が私の真前に立ち止まったその恐怖の瞬間、私はわなわなと口を震わせて、「ハイ、ホンチェ」ともう一度甘い甘い声でささやいてみた。

すると彼はくるとむきをかえ、ぐいと私に背中をさし出して座ったのである。ピンと立てた耳だけを私の方に向けて。私はそっとその背中を撫でてみた。すると犬はつと立ち上がり、私の股の辺りをちょいと嗅いで、ぐるりと私の回りを二回まわって、そうして突然、私のひざの上にとっかかりと座ってしまったのだ。私はもう感動してしまって、大きな犬の首を両腕にかかえ、「ハイ、ホンチェ、ハイ、ホンチェ」と言えば、彼はぐいぐい大きな体を押しつけてくる。

長い長い間、私は犬を撫でていた。それからそおつと立って、何度かふりかえりながら帰ってきた。彼は私のあとを追うでもなく、そのまま優雅に座って、私の方をじっと見ていたっけ。

あの日から、私はめっぽう口が重くなった。ハウドゥユードゥと手をにぎって、二、三の質問に答えれば、たいていどんな人かピンとくる。ある人には、いんぎんに礼をして席を立つ。バスポートをいちいち見せなくても通過する国もあるのだと思えば、名が無くてもそんなに淋しがることもないだろう。

(歌人・アムステルダム補習校)



まざる、まぜる、まじわる、

幼稚園の四月

豊田 一秀

子どもは、混ざることが嫌いだ。幼稚園の四月、

見ず知らずの人の中に入れられ、集団として扱われ、同じように行動することを求められ、仲良くすることを望まれ、また、それを他人に評価される。

人に対して攻撃的になったり、人の指示を無視したり、感情を外に出さないようにしたり、あるいは逆に、人形のように言いなりになってしまうのも、混ざることから自らを守ろうとする様々な態度だと

言ってもよいだろう。

人間の自我は本質的に混ざることが好まない一面をもっているように私には思える。以前に私が受けた持った子どもの一人は、一学期の前半だったと思うが「私は幼稚園に行く」と解けちゃいそうな気持ちになるの」と生氣なく訴えた。と母親から聞き、その言葉がドキッと強く私の心に残った。また、非常に個性的な男の子であったが、やはり誕生会の時に、皆

と一緒に遊戯室に行くのを嫌がり「そんなことしたら混ざっちゃうじゃないか」と私に訴えた子どももいた。どちらも混ざること拒絶しようとする孤独な、しかし健全な子どもの魂の発露であつたと思う。

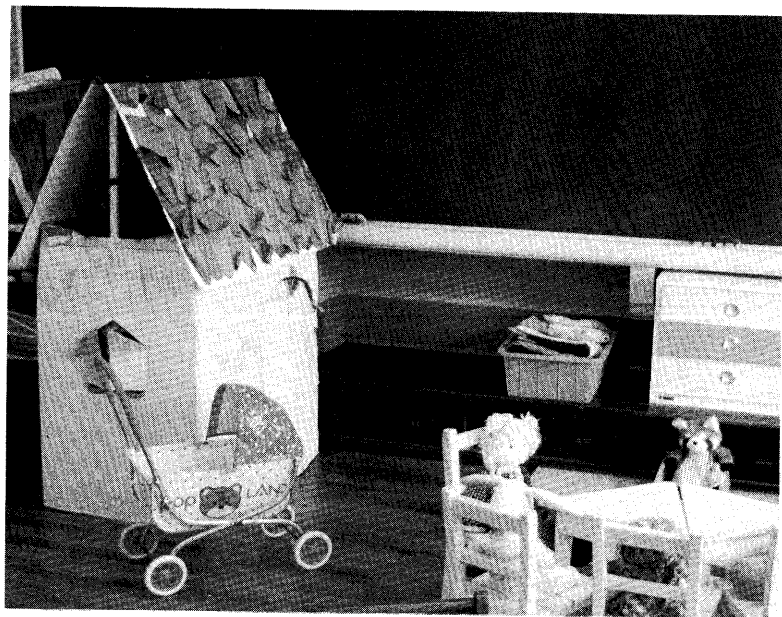
「混ざる」ことの嫌いな子どもも、「混ぜる」こととなるとその様相を一変させる。砂場、雨上がりの地面、子どもはゆったりと地面に座り込んで混ぜることを楽しんでゐる。時には、楽しむというより取りつかれてゐると言つたほうが良いような真剣な表情をしてゐることもある。

私は混ぜるということが、人間の行為の中で本質的なものの一つであるような気がしてならない。料理もその多くは混ぜることである。混ぜることによつて自分の善しとするものを創造する。食べること自体も口の中で食べ物を混ぜることだと言えよう。人は噛むことによつて食べ物を混ぜ、自身の中に取り入れる。呑み込むには口で混ぜる必要がある

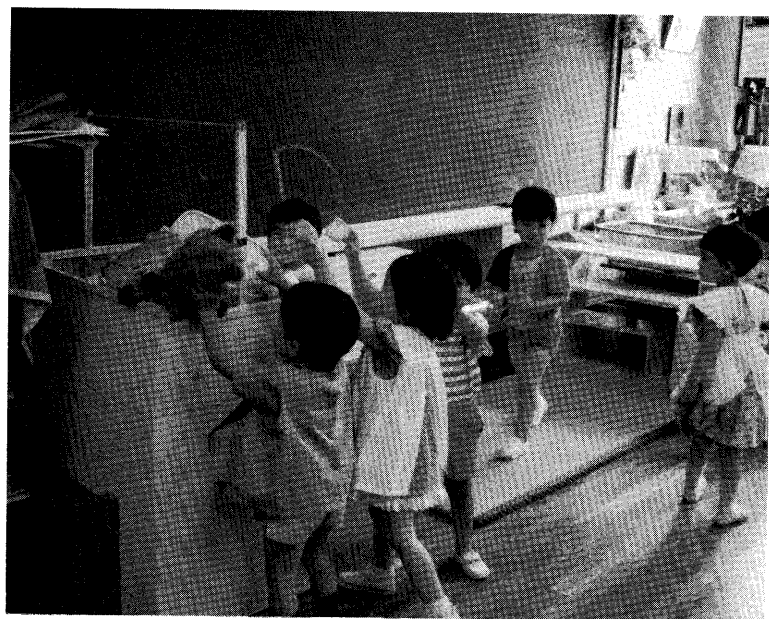
のだ。

「自分で混ぜたものは自分の内なるものになる」と考えると、幼稚園で様々なことを考える時の良いヒントになるような気がする。子どもは片付けが苦手だ。遊び始めた時にはものすごいエネルギーでもちやを出すのに、片付けとなるとたんに力が萎えてしまふ。片付けが遊びとは違つて創造的でないこと、次の遊びにすぐに移りたい子どもの気持ち等を考えると、このことも一応の合点がいく。しかし、人間の行為や思いを原初的に現してくれる三歳児の行いを見ると、今述べただけでは説明し切れない何かがあるようだ。例えば、遊び始めるときにも、籠に入ったレゴや積木をまず総て床にざーっと空けてからそれを使い始めるといふようなことを子どもはよくする。大人はつい、使う分だけ籠から出せばいいのになどとケチくさいことを思つてしまふ。おままごとコーナーもまた然り。子どもが遊び出しやすいようにと、ままごとテーブルの上

▶
写真
1



◀
写真
2



にきれいに食事の用意を並べておいたりすると、子どもは一気にそれらを乳母車や箱の中に放り込んで遊び始めたりする（もちろんこれはこれで、遊び出しやすいようにという私の意図は達せられたと思うべきなのであろうが）。私のクラスには、二、三人の子どもが入れるようなダンボールで作った家があるのだが（写真1）、ある時、しばらく園庭に行って戻してみると写真2、のような在り様であった。子ども達はあるとあらゆる部屋中のおもちゃをその家に詰め込んでいるのだ。子ども達があまり嬉々としてしているので、私はしばし言葉を失ってしまった。第一、その時の彼等ほどのような言葉を以ってしても、その楽しみを中断してくれるような状態ではなかった。

子ども達は混せているのだ。部屋中のおもちゃを混せているのだ。そして、自分たちの気に入っている家に食べさせているのだ。そして、片付けるのはまたしても私である。アーア……。

ひどく不適切な比喩だとは思いますが、いつだったか動物園の飼育係の人がカバの話をしていたのを思い出す。カバは水が好きなので、きれいな水がよからうと水を替えてやると、すぐにカバはその中にフンをしてしまうという。おやおやとプールの水を替えてやると、またすぐにしてしまう。しまいにイライラしながらも替え続けているうちに、ある時、カバはきれいな水より自分のフンで汚れた水のほうが好きなのではないかと気付いたという。動物に見られる一連の匂い付け行動の一種なのだろうが、飼育係にそこまで気付かせたカバの努力もなかなかのものであると、一人感心しながらも面白い話だと思った。カバが気持ち良いと思う状態と、飼育係が気持ち良い状態とは違うのだ。カバと人との価値観の相違とでもいったら良いのだろうか。

整った部屋はどうも子ども達の心持ちにそぐわないらしい。だからといって最初から散らかしておけば良いというものでも、もちろんない。少し誇張し

て言うなら、子どもは自分の手で世界を変化させて
みたいのだ。思い通りに身近な世界が変化するのを
感じて、逆に自分の意思といったものの存在を確か
めているのかもしれない。

そうだとするならば、散乱した部屋は子どもの作
品と言えるかもしれない。しかし大人はこの作品
を、多くの場合好まないので家庭でも幼稚園でもい
さかいが絶えない。

さて、色々なものを混ぜ、自分の作品を創りなが
ら、子ども達は友達や保育者と交わりを持てるよう
になってくる。与えられた環境を子どもが自分で色
付けすることで、いやそれ以前に、自分で色付けし
てもよいと思えることで、子どもは自分を発揮し始
める。

子どもが幼稚園という一つ場で、様々な人や場
で交わるようになるには「関わっても混ざらな
い」自分を持つことが必要なのだ。

ただ、保育者は自分が個々の子ども達に色付けさ

れるのを楽しみ、許容しながらも、色付けの仕方
を、ひとり一人の子どもに様々の仕方で示すことは
必要であろう。

混ざることの嫌いだっただ子ども達も、あるがまま
の自分の力で生活することが出来るようになってく
ると、混ざることまた、楽しめるようになってく
る。ある時、一人の子どもが洗濯機になってとい
うので、両腕の中にその子を入れて洗って(?) いる
と、僕も私もと、一斉に子ども達が両腕の洗濯機の中
に入ってきた。大勢の子ども達は私の両腕の中で
芋洗いのようになりながら、友と混ざることを楽し
んだ。混ざっていても自分が解けてしまうことはな
いと確信を持っていたからだと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

ある日の育児日記から

***** (16) *****

佐藤 和代 ***

先日、私の祖母が亡くなりました。敬（主人です）は、「人の死を見ることって、今はめったにないんだから、圭にはしっかり見せておこう」と言います。私もうんうん、とうなずいたまではなかったのですが…。

“見せる”だけですむことではないのですね。

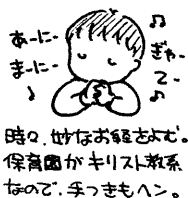
死化粧をした祖母と対面してから、通夜、葬式、出棺、火葬…と、いろいろな場面で圭はききます。「ひいおばあちゃん、どこ？」それに対して、私の答えは「天国へ行ったの」「お棺の中よ」「小さくなって、あの壺にはいつてるの」「神

様のところ」と、一貫しないことおびたしい。宗教をもたない私が、突然神様をもちだしても、説得力はありません。

結局、圭がどう理解したかは本人のみぞ知る、といったところ。死というものの説明なんてあきらめて、祖母の思い出話してやることにしました。明治、大正、昭和と、激動の時代を生きた祖母です。語るところはたくさんありますから、とこで困ったことがひとつ。お葬式に出て以



来、父方のひいおばあちゃん（94歳で元氣！）の話が出ると、圭が「まだ死んでないのね？」と確かめるのです。圭、それは言っちゃだめ。ひいおばあちゃんの前では特にだめよっ！



大地と共に（上）

川上 美子

千葉県より青森県六ヶ所村に転居して、一年が過ぎた。地元の方々とも親しくなった。今回は、ひとりの方との出会いを通し、多くのことを学ばせてもらったことを書きたいと思う。

一、出会い

その方は、松島烈晃さんです。下北半島の付け根にある野辺地町の目ノ越部落で、酪農を営んでいます。ふとしたきっかけで主人が知り合い、牧場見学に家族で出掛けた。牛舎を案内され説明を伺った。そのうち、松島さんがどうして酪農を志すようになったのか、話して下さった。私は初対面、主人も二度目にお目にかかったのだが、物静かで謙虚な語り方の中に、確固たる信念があり、私達は引き込まれるように話を伺った。出身地は東京都で、終戦を東京で迎え、深い思索を経て、北海道で農業や酪農を学び、昭和二十八年に当地に入植された。むつ湾を見下ろせる広大な牧草地も、最初は一畝一畝と荒

野の開墾から始まったと聞き、頭が下がった。御自分の仕事への誇りと自信、自然（の恵み）に対する深い認識が、語られる言葉の中ににじみ出ている。私達は深い感動と尊敬の念を覚えた。

数か月後、また家族でおじゃますると、今度はたくさんさんの植物と昆虫の標本を用意して迎えて下さった。これらは「目ノ越の子ども会」の子ども達が、この地で採集し標本にしたものだった。松島さんがこの子ども会を中心になって指導されてこられた。そして、その動機、活動内容、また親身になって子どもたちの世話をなされた当時のエピソードを興味深く伺った。

その後何回かお会いし、お話を伺ううち更に色々知りたくなり、目ノ越部落入植三十五周年記念誌『語りつごう我等のあゆみ』（追補再刊号）と、子ども会実践記録『はまなす』の貴重な資料を拝借し、読ませていただいた。

開拓から農業へ、さらに酪農へという実生活の歩

み、また子ども会活動の歩みは、常により良いものを求めようとする、深い考えに基づく実践の積み重ねだった。その真摯で、ひたむきな姿勢は尊く、胸を打たれた。現在『豊かな日本』と言われるが、過去の多くの方々の御努力があつたからこそと知った。精一杯生きてこられた方達の証を、皆様にも御紹介したいと思う。

二、『語りつごう我等のあゆみ』より

この記念誌は、昭和五十五年に入植三十五周年を機に発刊されたものに、その後昭和六十三年までの歩みが追補されている。目ノ越部落自治会の発行で、主な内容は、○沿革と概要 ○現況 ○部落史 ○お祝いの言葉 ○各人の思い出 ○写真集追補では、○若い後継者の声 ○目ノ越の考古学的歴史 ○「地域の活力となっている生活改善活動」（全国農業コンクール「名誉賞」受賞の原稿）が載っている。

(一) 沿革と概要

(1) 入植の頃

敗戦の昭和二十年秋に数戸が入植し、歴史が始まる。食糧不足の中、政府の緊急開拓政策により、二十一年に青森県内、県外から二十九戸が正式に入植された。

(2) 営農のうつりかわり

「入植当時、食べる物も農具も資金も技術も更に肥料も不足し、ただ鍬一丁、鎌一丁の手作業をし、せめて耕馬一頭ほしい、畜力農業ができれば……と考えたものです。」と当時をふりかえっておられる。入植の初めはいかにして食べていくか、から始まり、一番手っ取り早い、いもが蒔かれた。肥料の少なくてすむ大小豆も植えられた。年を経るにつれ雑草が増え、除草が楽で食用油の自給もからんでナタネが栽培された。しかしナタネの連作で畑がやせ、雑草がはびこった。

補助金が畑優先であったが、後で開田も始まり、

根気強く水田作りが続けられた。

(3) 酪農への道

二十八年、晩霜のため、大小豆、馬鈴薯等が全滅する。二十九年も初霜と冷害で被害が続く。二十七年に牛が初めて飼育されたが、徐々に酪農への道を歩み始めた。

(4) 農業機械への道

「開墾は手起こしから、手耕・馬耕の併用、畜力農業中心になり、更に畜力と耕耘機の併用、耕耘機とトラクターの併用時代を経て、現在のトラクター中心の農作業に変化しました。」と松島さんは書いておられる。目ノ越は機械化の先進地で、良き指導を受けられた。

(5) 生活環境づくり

昭和二十七年に入植された松島さんは、「当初は三坪の掘立小屋から始まり、十坪半の住宅とは名ばかりの家に馬・山羊・鶏との同居生活が続ぎ、三十三年暮れに妻帯するので十五坪半のやや住宅らしい

ものになり、同年十二月二十四日夕方、電燈がつく迄は明治時代の農民と全く変わらず、家畜と同居しながら、つるべ井戸にランプの灯り、郵便は配達されず、交通は徒歩、運搬は馬車の生活でした。」と書いています。「思い出」を読むと、家畜のために水を得る苦労は並大抵ではなかったことがわかる。やっと三十五周年に、目ノ越全域に水道が完成した。三十三年に電燈がつくため、国、県、町への必死の交渉がなされた。

公衆電話一台がはじめて設置されたのは三十六年だが、設置された家の方は、呼びに行くため自転車、スキーで走り廻ったと書いてある。四十八年に各戸に電話が設置された。三十四年にバスが開通する。目ノ越地域は強風地帯だ。二十七年から、「飛砂防備保安林工事」が始まる。海岸飛砂、沙害を防ぎ、人家、道路、農地を保全するためである。十年間で百町歩（約一km）が植林された。「十年間も植林に出て下さった方々の汗と魂がにじんでいる。」

と記してある。

(6) 今日に至るまで

「電気がついたことで、生活の合理化が始まり、農業経営も、自給中心から主要作物の換金と畜産収入もあがる混合農業へ、それから酪農経営へと歩んできました。」松島さんは『大地と共に』と題して、その後の発展過程を述べておられる。「原始農法から、資本主義的合理化されつつある近代酪農経営に、生活の面でも明治時代から、一挙に家庭も畜舎も電化され、水道、電気はつき、車社会に三十年足らずで変貌したことは、日本の歴史は勿論、世界の歴史の中でも珍しい例だと思えます。」

(二) 「思い出」から

二十三名の方が思い出を綴っておられる。「筆舌に尽くせない苦勞で、いつも死と隣り合わせの生活」「一生忘れない開拓の苦しみ」「激しい労働に、空腹に目が眩み全身の力がぬけ、その場に佇む事し

ばしば……」、「着る物も履物もなくハダシで働いた」等々、想像を絶する御苦労をなさってきた。特に家族が病気になったり、入院された時は大変だった。飴を仕入れて、遠くまで歩いて売りに行かれた。「子ども達が野辺地で花売りをして学校の費用に当てた。」さらに不運が重なり、馬が死んだり、「猫の手も借りたい田植時期、五年生の男の子が炊事をしていたところ、不始末で火事となり、家も牛舎も全焼、米一粒もなくなった。」東京への出稼ぎ等々、私は涙なしでは読めなかった。

しかし、こうした言語に絶する御苦労の中であって、夢と希望とロマンを胸に持ち続けてこられた。「苦勞の連続でしたが、『苦しみをロマンに変えよう』という共通の信念を持って、協同の精神を大切に暮らしてきました。」「農業立国論を交わし、若い気力に満ちていた。」「『いつの日にか人間らしい生活ができる。』との希望、所謂開拓魂のみに生き続けた。」「我々開拓者の流した汗はなんだったのか。

その尊い汗が、友を知り、人生を語り、限らない幸福のロマンを求め続ける人生最大の心の糧である。」と、述懐しておられる。

松島さんは、前述の(6)今日に至るまで、の後に、次のように書いておられる。「ここ迄来るのに知力・体力・技術・資本・全て足りない中で、どの時代も常に全力を尽くしてどんな悪い環境、最悪の状態にも対処してこれましたのも、精神力と目ノ越の地に開拓者として生きるように与えられた使命感、部落の人達の団結心と、立ち上がれるように親切なる御指導して下さいった先生、親兄弟、友人の暖かい物心両面の御援助と国、県、町の行政面にも支えられたからで……」と、感謝とお礼を述べておられる。感無量である。

(三)、子どもの生活

「当時、目ノ越地域から二十数名の子供達が通学していたが、その殆どの子供達が昼食に弁当を持参

していなかった。通学距離にして三乃至六キロ位の子供達が、通学の登下校に空腹をかかえて、……どの子も顔色が悪く、又半ば栄養不良の状態におかれていた。」とある。

また、当時を思い出すと、全部が苦しい事だけではない、「春には父と一緒に野山に火を入れ、夏、秋には馬に喰わせる草刈場の枯葉焼き、これが私の学校から帰っての仕事でした。夕日と枯葉のもえる炎が雄大でドラマチックであった。夏は海で泳ぎ、しゅり貝を採り海辺でたき火をして食べた。秋は栗、あけび、山ぶどうなど、どこの山に行っても持てないぐらい沢山あった。冬は家の周りでスキーができ、暗くなるのも忘れて遊び回った。私の子供の頃は、自然と友達で、買った物で遊ぶことなどなかった。大自然の中で育ったことは幸福であったと思う。」また、「牛の分娩が難産の時、大きい子牛が生まれるのではないかという期待と、親牛も子牛も死ぬのではないかという不安が頭の中を駆け巡る。

近所の人達の協力で無事大きな牛が生まれた時の感激はひとしおである。」とふりかえっておられる。「バス、タクシーもない頃で、お父さんが野辺地駅から二十キロ近くも歩いて帰ってきます。その間、ランプの芯を細くして、お母さんが童話を子供が暗記する程、繰り返し読んで聞かせることもたびたびでした。」と書いておられる。

『小さいながらも働き手』『おともだちは牛や羊』と題して、大人と一緒に野良仕事をしている子ども達、また動物と遊ぶ子ども達の写真が掲載されている。きびしい生活環境の中にあっても、家族のほのぼのとした絆を感じる。

——つづく——

(はるにれの会)

新しい年度が始まり、新しい子ども達を迎える季節となりました。

今月から、小林恵子先生の新連載「婦人宣教師、ミセス・ブラインの「おばあちゃんの手紙」」が始まります。アメリカ宣教師の目から見た、明治初期の日本の様子など、とても興味深いものです。次回からは、ミセス・ブラインが孫に宛てた手紙を、小林先生の翻訳で紹介します。

土橋光子先生の「庭の番人」は、夏・秋・冬とつづきます。庭の桜の木と、子ども達との、季節の中での出会いを書いていただきます。どうぞお楽しみに。

＊

五年前の四月、息子は幼稚園に入園しました。楽しみにしていた幼稚園でしたので、行くことには何の抵抗もなく、楽しく通うことができました。でも幼稚園には、お母さんも一緒にいてほしい、見ていてくれれば安心して遊ぶことができる、という毎日でした。また、自分の大

切にしているおもちゃを幼稚園に持って行きたがりました。先生におことわりして、ポケットの中にそっといれておき、時々さわっていたようです。

幼稚園は楽しそうな所だけれど、自分一人だけその場において行かれるのはいや。だから、お母さんも、大切なおもちゃも一緒。家庭から、社会生活へ一歩ふみ出したばかりの三歳の子にとっては、当然のことなのでしょう。

五月も半ば、お弁当が始まって、私はまだ、つき添っていました。ところがある日突然、「お母さん、今日から帰ってもいいよ！」と宣言。その後は一度も「一緒にいて」とは言いませんでした。

長い時間をかけて、ようやく自分の気持ちに区切りをつけたようです。「慣れてしまえば、大丈夫」とつき離す強さも時には必要なのでしょうが、子どもの性格と気持ちを考えて、時期がくるまで待つて下さった先生の忍耐に感謝しています。

(K)

幼児の教育

第九十一巻 第四号

(一九九二年四月号)

定価四五〇円 (本体四三七円)

平成四年四月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二一

発売所 株式会社フレール館

東京都千代田区神田小川町三一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話 〇三―三三二九二―七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレール館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

フレーベル先生・幼稚園創設150周年記念出版

フレーベル賛歌

——子どもと人間の友あての女性たちの書簡——

旧ドイツ民主共和国アカデミー文庫と、パート・ブランケンブルクのF・フレーベル博物館に、フレーベルにあてた教え子たち約200人の1,000通を超える書簡が収蔵されています。一部公開されていますが、それらを除いた約140通の書簡がドイツ幼稚園創設150周年を記念して1990年に出版されました。本書はその完訳本です。書簡はドイツ教育委員会と大学教育学部の委嘱を受けたH・ケーニツ教授の手によって精選され、年代順に配列されています。「さあ、私たちの子どもたちに生きよう!」という先生の呼びかけの言葉と、その根源にあたるキンダーガルテンの思想と、当時の社会や経済の困難さや人々の無理解とたたかう優れた魂に触れることができます。フレーベルを敬慕しキンダーガルテンの運動に身を挺した女性たちの知性と情熱を具体的によみがえらせます。



特 色

- ・幼稚園草創期のフレーベル先生の教え子たちの手紙を年代順に紹介し、その揺籃期に生きた人々の苦難と歓喜にいろどられた歴史的証言を集成しました。
- ・師・フレーベルに寄せられた教え子たちの数々の手紙は、幼児教育の父フレーベル先生の魅力ある人間像と教育思想のエスプリを余すところなく浮き彫りにします。
- ・“キンダーガルテン”運動に身を挺した女性たちの英知と情熱にあふれる生き方、考え方は示唆に富み、幼児教育・保育に携わる人々の使命感を喚起します。
- ・幼稚園の園長や保育者の立場からの保育内容や方法に関する相談や報告が多く、保育現場の得難い保育実践上の参考資料です。
- ・女性たちがいち早く獲得した職業的地位である幼稚園教員、保育者たちの苦難の歩みが生々しく表白されており、女性職業史、婦人解放運動史の貴重な資料です。

●推薦します。

広島大学名誉教授／日本ベスタロッター・フレーベル学会会長

荘司雅子

全国国公立幼稚園長会会長

江橋照雄

全日本私立幼稚園連合会会長

小林龍雄

日本保育学会会長

岡田正章

全国保育協議会会長

水岡 薫

岩崎 次男 他16名・訳

A5判・420頁・写真資料32葉

定価4,000円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館



見る目を育てる実践シリーズ

森上史朗／大場幸夫／吉村真理子・編著

子どもをどう見て、その生活をどう読みとるか、たくさんの実践とそれに添えた分析のコメントを通して保育を考える。新教育要領の基本に沿った実践と指導の集大成。

〈全5巻〉

- ①子どもを見る目
- ②保育実践を見る目
- ③保育計画・形態を見る目
- ④保育の現在を見る目
- ⑤問題行動と障害を見る目

A5判・平均228ページ・定価各1,751円(税込)

セット定価8,755円(税込)セットケース付

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館